

ENHAVO

S-ro Mituisi venis en Hokkajdo
〈私の近況報告にかえて〉
—三ツ石氏がスキ-マラソン参加のため来道—

Mituisi K 三ツ石 清 2

Pri iu memorajo
ふと目にとまった「自分史」のひとつ
Acuŝi HOŝIDA 星田 淳 4

'94 Hokkajda kunlogado de esperantoj
'94 北海道エスペラント合宿
Emiko BABA 馬場恵美子 7

EKZAMENO DE JEI KURSO POR ĜI
JEI学力検定試験と特訓コース
Acuŝi HOŝIDA 星田 淳 8

Mia amika memorajo
私のエスペラント交友録(9)
Soĝirou Jamamoto 山本昭二郎 9

Kia esuŝtas vialingva saluto por
"Bonan apetiton!"
「いただきます」「ごちそうさま」の国際性は?
Acuŝi HOŝIDA 星田 淳 12

NEPETITA KOMENTO AL "NE TIEL, SED
TIEL ĈI!"
〈学習の頁〉に思う
Biblioteken niajn librojn!
図書館へ本を!
Nekrologo 訃報
Acuŝi HOŝIDA 星田 淳 15

Kial Rumiko ne ĵetis sin en hokajdan
Esperantion?
彼女はなぜ北海道連盟にくわわらなかった
のか? — ルミコの謎
KAWAHARA H. Kazuya カワハラカズヤ 16

^RLeklamo—"Hanako Lernas Esperanton"
広告—"Hanako Lernas Esperanton"
GRAVA KOREKTO 前号記事の訂正—^{OK}
KAWAHARA H. Kazuya カワハラカズヤ 21

RAPORTO DE LA KUVINA KOMITATA KUNVENO
DE HEL
第5回HEL委員会報告
Acusi HOSIDA 星田 淳 22

Hindrangeo あじさいから学ぶ
Mituisi K 三ツ石 清 23

La 58-a KONGRESO de ESPERANTISTOJ en
HOKKAJDO
第58回北海道エスペラント大会
Emiko BABA 馬場恵美子 24

El redaktejo 編集部から
4月発行の予定が、大変遅れてしまい
誠に申し訳ございません。

なぜか大スランプに陥ってしまい、エ
スペラントの本を開く気にもなれず、そ
れでも合宿や役員会にはなんとか出席し
たおかげで、皆様の元気とやる気を分け
ていただき、やっと52号発行ができた
ました。

世界大会に参加を申し込んでいるので、
ソウルへ行って、より沢山のやる気を持
ち帰りたいと思っています。

53号は、道大会開催に合わせて発行
の予定です。

(Ejko Abe 阿部映子)

△私の近況報告にかえて▽

啓
中川区、94-102-118

2/05:上野発、夜行急行八甲田(八甲田)で青森、北海道に渡り尾張・徳川ゆかりの町・八雲町の牧場・那須さん宅で6・7・8日、牧草地でスキー練習、9日、広島町児玉さん、10日、千歳市、中里(内科医師)さんに。この3氏は、いずれもエスペランティストで、北海道での私の行動も、この方々の支援のお陰です。感謝し、帰りの八雲に一泊、難道。札幌く雪祭り(早稲物客・千歳空港・大雪で閉鎖、連休が重なり、特急は超満員、札幌一函館間、指定席通路までが自由席客で満員、空の旅に慣れた人達が太弱り。私・汽車旅行愛用者には、おかしくらいでした。

エスペラント会について

2/12(土)午後、札幌エスペラント会・例会に出席。前半の入門クラスで、テキストの(模範読み)とかで読まされる。20年ぶりが、後半は児玉氏指導クラスの時間。pakoon post、paaso について、これは、interpozitivoo であるが話したが、あまり皆さんの関心なし。エス会は、楽しむ会なのでね。

東北新幹線東京着20分遅れ。pm9:00、冬三層に着いてもpm11:30では、バスはなし。電話で千駄木・団子坂上の従姉妹に救援・連絡、10年ぶりに訪ねる。86才の従姉妹と夜を徹して語り合う。彼女が引退止めるので4日間、毎夜、話し合う。10日帰る。東京では、小石川植物園を50年ぶりに訪ねる。

2/10夜、千歳・懇親会、市長、公使、スキー連盟会長等と記念撮影。ノールウエイ公使と握手。

11日千歳・ホルメンコーレン・スキーマーチ(3000km・200km、5km)参加。私は5キロ(予定)・公使夫妻も走る。私の記録昨年より、遅い。失敗。

2/13、札幌国際スキーマラソン大会(32000人参加)50km・25km・10km、私は10キロ(予定)マイナス8度、小雪、スキーが滑る。嬉しい。札幌ではユース・ホステル利用。風邪をひかず元気に旅しました。昨年は、インフルンザで参った。

16日、東大理学部・小石川植物園へ。徳川時代の(小石川養生所)赤ひげ先生で有名で、ミニにあった。温室のアルバイト(11年間)の女性が、時間過ぎだが(午後3時)特に入れて下さった。再会を約束。彼女60才くらいか、く植物って、たのしいわねと語り。11年間、温室を任されていてもアルバイトとは、ミニに豊裕な日本の政治の貧困を見る。植物学もく分子生物学的研究が重んじられて、分類学は、片隅に置かれている現状。この温室係りは、美しい知的な女人。植物に人生を打ち込んでる様を、方です。

2/11夜、スキーとザックを背負いながらく雪祭り(早稲物、道がつるつるで怖い。私も一度、スッテン・コロリン、でも怪我はしませんでした。スキーレース大会について。

70・71才と2回、札幌国際スキーマラソンに参加。25kmレースに出場したが、今回は80才であるし、たまたまの10kmのく歩くスキーへに出場。

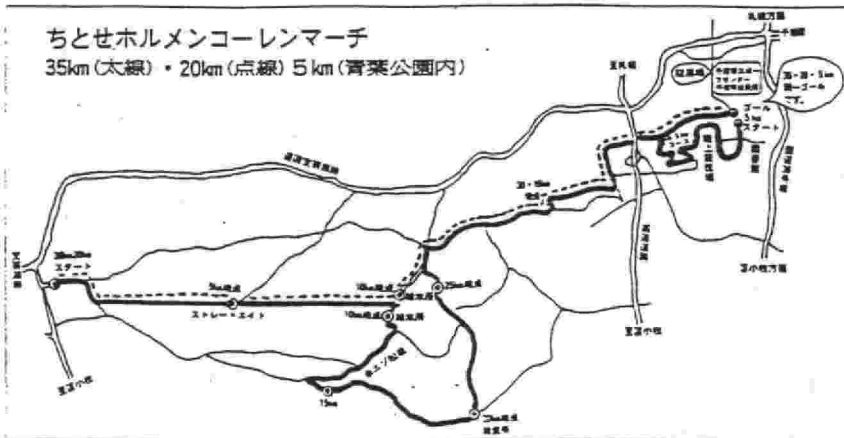
この国際大会、参加者総数:32000人、その内80才以上は8人でした。この80才は、すべて10kmに、10kmスキー出場者、1100人くらい、私の成績は恥かしいが、昔にするとくペリから500番です。完走後の感想は、80才までは、なんとかいけるなです。もっとも前記の支援者の方が、心配して(ドクター、ストツプ)になさるかもしれない。しかし、来年は必ず、出場したい。競技用のすく軽いレーススキーを買いたい。いまの歩くスキー靴も痛んでるし。

2/10、市立植物園(私は、東海の森、地区解説員)に行く。皆さんの歓迎を受ける。今年から温室(熱帯雨林植物のある)の勉強が始める積もり。意欲満々。今まで、温帯林(冷温帯林・暖温帯林)、亜寒帯林の植物を研究していました。

皆さん、長い文章を読んでいただき、有難うm

今回は390人出場

ちとせホルメンコーレンマーチ
35km(太線)・20km(点線) 5km(青葉公園内)



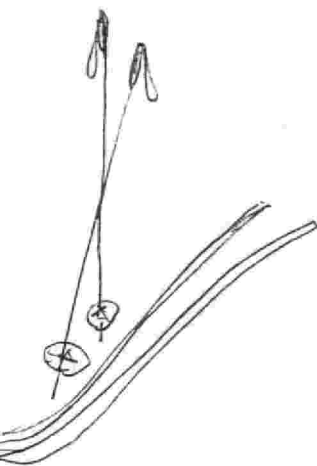
ちとせホルメンコーレンマーチ

最高齢

80歳の二ツ石さん、5キロに挑戦

千歳の冬のビッグイベント・第十八回ちとせホルメンコーレンマーチ(千歳市民歩くスキーの集い)が二月十一日、支笏湖の林道と青葉公園コースを会場に開催される。今回は、メインレースとなる三十三キロに七百七十六人が参加するほか、各種目合計で三百九十人が出場、熱戦を繰り広げる。司入会は、市民の冬のスポーツ振興として、昭和五十二年からスタート。昨年の大会から市体育協会の冬のイベントとして位置付けられた。今回は駐日ノルウェー大使館のテリエ・ヨハネセン大使が出場する。

参加者は、三十五キロに百七十六人、二十キロに百六十一人、五キロ五十三人。今回は地元の自衛隊が預習と重なった関係で、昨年より百二十人少ない参加者となった。最高齢出場者は名古屋の三ツ石清さん(八〇才五ヵ月)に挑戦する。当日は午前九時から千歳市公民館前で開会式が行われたあと、三十五キロと二十キロの出場者は、バスで丸山のスタート地点に移動する。スタートは各種目とも同十時半で、一斉にスタートする。



02-13

札幌・国際スキーマラソン大会 10キロ
歩くスキーの部に出場。
1100人の内で、ビリから50番でゴールの良成績(?)でした。

ふと目にとまった「自分史」のひとつ

—— 小樽の量徳寺で学んだエスペラント

A. HOSIDA (Tomakomai)

2月、東京である人からこの手記を見せられた。「小学校時代の先生だった人ですけど、若いとき小樽でエスペラントを習ったんですって——」とのこと。現在埼玉県母親大会実行委員長の板倉三重さん、もう80才に近い方だという。

この手記に出る量徳寺は昭和初期小樽で盛んだった仏教エスペラント会の拠点だった。写真のザメンホフ祭はROの記録によると、1936（昭和11）年12月15日、小樽エスペラント協会、仏教エスペラント会、会話会の三団体共催だった。

今もEsp-ujoにある方2人、S-roj江口音吉、高橋要一の若い姿もある。高橋さんに人名を教えて載いた。

なお手記の中に、小樽エスペラント協会の解散は1938（昭和13）年頃とあるが、39年に

もザメンホフ祭をしているし、40年の北海道大会は小樽で開いている。しかし戦争へ向かう時代のなかで次第に活動は出来なくなって行った。

（写真の出席者氏名判明分）

1. 数野正直（スマサオ、日産）
2. 藤川哲蔵（小樽新聞社植字工）
4. 桐野興太郎（小樽税関）
8. 高橋要一、
9. 江口音吉
10. 辺見敏男（小樽新聞社植字工）
11. 岡崎郁子（12. の妹）
12. 岡崎英肇（エイジウ、量徳寺の次男、ROには岡崎霊夢となっている）
15. 坂下清一（後56～62年HEL委員長）
16. 板倉三重（手記の筆者）
17. 福田仁一

埼玉母親連絡会／編著の「戦争と女たち—平和を産みだす母性の叫び」という本（6頁に表紙のコピー掲載）からの抜粋です。

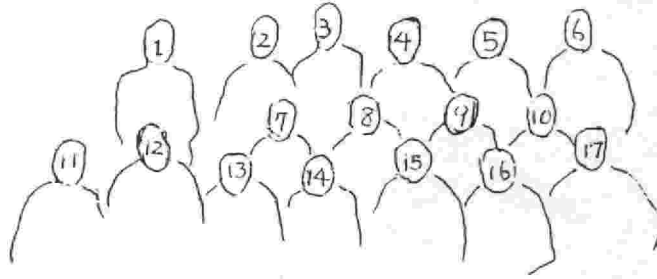
板倉三重さんの手記は、「皿学童疎開と反戦活動」の中に168頁から179頁にかけて「戦争前夜」という題で載っています。

その部分だけのコピーが手元にありますので、もしもお読みになりたい方がおられますらコピーをお送りしますので編集部（阿部）までハガキで御連絡ください。

1936(昭和11)年12月15日

小樽ザメンホフ祭

(入舟町 量徳寺 書院にて)



III 学童疎開と反戦活動



「ザメンホフ博士誕生祭」に集まった仲間たち
(筆者は前列右から二番目)

よく磨き上げてある庫裡の廊下は、淡い電灯の光にぶく光っていた。廊下を一つ、三つ、四つくらい曲って奥の室についた。障子をあけた加藤君は「おぼんです」といって、さっきよりいっそうにこにこした。

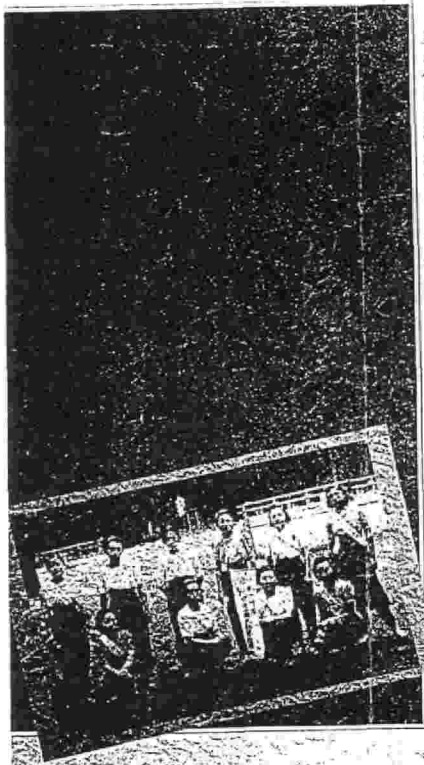
「五畳もあるような広い部屋の床の間に近いところに女の人が二人、男の人が三人もう来て待っていた。加藤君の兄さんという人が度の強いめがねの奥から、「よく来ましたね」と私に声をかけてくれた。男の人のなかに若い坊さんが一人いた。体の大きい品のよい顔をしているこの坊さんは、この寺の御曹司の若任職であった。そのうち男の人が三人、「おぼんです」といって入ってきた。

いよいよ勉強である。私は加藤君のとなりに座った。御曹司の若い坊さんがチーフであることがわかった。

チーフの若任職がザメンホフ博士とエスベラント語について説明してくれた。この小樽エスベラント協会には、各国のエスベラントのアドレスがあるから、早く文通ができるように勉強してほしいと激励してくれた。

私は自分を入れて一〇名の人たちの顔を改めて見なおした。みんな立派に見えた。そのなかに自分に加わっていることによるこびとほこりさえ感じた。寺とエスベラント語、このそぐわない対象も完全に一致した。

私は一回も休まずエスベラント語の学習会に出席した。エスベラント文の『イソップ物



平和を産みだす母性の叫び

戦争と女たち

平和を産みだす母性の叫び
埼玉母親連絡会／編著

おゆみ

目次

- ◆狂への召喚令状／たった一枚の赤紙に夫を奪われた若姦の目撃。
- ◆行人の大奮闘をかかえて／戦時生活を見事に生じた御阿彌一氏品。
- ◆痛み／東京大空襲で焼け出された母子が疎開した広島空に……
- ◆着手を洗ってください／戦を獲った娘真実の母に女・子どもは……
- ◆さすあと／「また来る」といった言葉や娘女は母ら如人となった。
- ◆治安維持法のある／弾圧・拷問にも屈しなかつた反戦の活動記。
- ◆戦時・死の彷徨／とり残された同胞をばっけていたものは……
- ◆テニアン島玉砕のとき／追いつめられた日本軍は黒魔と化して……

定価980円
0057-260377-0086
(61030)



アジアのサマの面を聞き、話し合おう！

海外旅行に出る人は多いけれど、ほとんどは観光地めぐりで、現地の人達、特にアジアの人達と直接話し合うことは少ないようです。今年韓国で開かれる世界エスベラント大会に出席するアジアの参加者のうち十一ヶ国の代表が日本各地を廻り、お互いの国情、文化の理解につとめ、交流を深めることになりました。北海道には次の二人が来訪される見込みです。

*チム・ソカ 氏

カンボジア政府大蔵事務官

カンボジアエスベラント協会会長

*チヨ・ドグスレン 氏

元モンゴル科学アカデミー百科辞典部長

元モンゴルエスベラント協会会長

苫小牧ではちょうど本町公民館で公民館まつりが行われているのでそのなかで次の計画を組みました。多数の御参加をお待ちしております。

講演会：「カンボジア・モンゴルの文化と

社会を語る（仮題）

と き 八月二六日午後五時～六時半

ところ 本町公民館 分室

参加費 無料

なお六時半以後お二人は公民館二階ホール
の「サークル交流パーティー」に参加します。
第十八回公民館まつり実行委員会

94北海道エスペラント合宿

94 HOKKAIDA KUNLOGADO DE ESPERANTISTOJ-

馬場 恵美子(札幌)

北海道エスペラント連盟主催の合宿が5月13日(金)~15日(日)昨年と同じ浄土宗法然寺(岩見沢市)を会場として行われた。壁には同市でのエスペラント講座の募集チラシ、住職である渡辺晋道氏の取材記事、寺院を利用しての講習会などについて掲示がある。

初日 開講式で、実行委員長の渡辺氏より「今年から合宿参加者には受講証が発行され、三枚目達成者には記念品が贈呈される。合宿最終日が受講終了日となるのでは無くここから翌年につなげるものとなって欲しい。」連盟委員長の星田淳氏より「間違いをおそれずに気軽に書き・話すことで己の間違いに気付き、また気付かせる、そういった場此の合宿を活用してみよう。」その後 *enigma* の時間では渡辺氏考案のビンゴゲーム。25の升目に形容詞(aで終わる)を埋め一人ずつ答えてゆき早く一列出来た者の勝ち。しかし副詞(e)にもならないとダメとあって参加者からは、「malはアリなの?」「色はダメなの?」「kiaなんかはどう?」騒ぎながら夜はどんどん更けてゆく....

二日目 講師の都合から学習コースは1本となり文法・用法・研究コース(学習1)。これは各発表者が普段から疑問に思っている語法、あるいは自分なりに理解した文法を助言者(星田)からのヒントを得て、論文を発表しようとするもの。「solaとsole,二卵生双生児」(渡辺康子)「代名詞とか形容詞について考える」(渡辺晋道)「自動詞と他動詞、エスの5文形」(金森美子)参加者からの鋭いツッコミや、「この際だからついでに教えてよ」「そこはこう考えれば」と助言者、発表者、参加者それぞれが立場を越えて意見のぶつかりあいとなる。午後からの眠い時間を *amuza tempo* に。昨年菊島和子さんよりプレゼントされた歌集 *de Kant' al Kanto* を使い金森さんの指導でロマンチックな歌を中

心に歌い、インスピレーションゲーム(馬場)では自己紹介をエス作し誰かを当てるなど。会話力増進コース(学習2)では事前に宿題を配りその回答状態によって授業を進めていった。*bankedol*は同寺で。

三日目 検定試験特訓コース(学習3)過去数年間のJEI学力検定の傾向と対策を解説し出題者の落としアナにはまらずに合格することを目指す。逆に弱いところを発見することとなる。(数が言えない・書けない、LとRを書き分けられないなど)実際に学力検定を受験したのは3級2名、4級2名。前日深夜迄続いたバンケードと勉強疲れと試験の緊張感にグッタリしている者もあったが最後の学習時間にそれぞれの合宿の感想をエスペラント文にまとめて意見発表を行った。また参加者からは「楽しみながらできるゲーム感覚の物を」「問題提起をして取り組むことは新しい発見となった」「学力検定を受けることが、その地域において色々な意味の(エスペラント界の内・外を問わずに)格付けになるのでは」「お酒が飲めて楽しめればそれ以上は(?)...」などの声寄せられ「今日の日はさようなら」を歌い解散した。

参加記念品は今年の世界大会に向けてソウル市内の地図・韓国ガイドブック、有志によりエスペラント訳した「アイヌ新法」、菊島さんからはスタンプ・シール・パッチが贈呈された。

学習面についてはクラス分けは行われなかったことが、結果的には一つの問題に全員が自分の意見を確認できる機会となり好評であった。また事前に資料請求の形で合宿の概要、提出問題を設けたことは主催者側についても参加者の状態を把握するための効果があり一歩前進したこととなった。小規模ではあるが全員参加の合宿であった。図書販売については「はじめてのエスペラント文法」(藤巻謙一著)が好評であった。参加者17名。資料請求者19名。図書売上51,978円。

J E I 学力検定試験と特訓コース EKZAMENO DE JEI KAJ KURSO POR ĜI

Acuŝi HOŝIDA (Tomakomai)

Oni ĝenerale ne emas havi ekzamenojn en lernejo. Ni esperantistoj ne lernas nian lingvon en lernejo, sed libere laŭ sia maniero aŭ hejme aŭ en kunsidoj. Ni rekomendas al samideanoj havi ekzamenon en nia ĉiujara kunloĝado, ĉar ĝi klare montras al la ekzamenitoj, kio estas la atingo kaj manko de ili. Ankaŭ specialan kurson por la ekzameno ni havis en la kunloĝado.

試験の効用

我々エスペ란ティストは学校で習ったわけではなく、学び方も実用的な方法(文通、会話等)も一人一人違う。自分のレベルはどのあたりなのか、どんな所がまだ不十分なのか——「試験が好き」という人は余りいないようだが、試験を受けてみれば一番よくわかる。去る5月の北海道合宿(岩見沢)ではJEI検定試験特訓コースを設けた。

教材にはR. O. の5月号に出た昨年の試験問題を使った。4回分の問題が並んでいて分量が多かったが、どんなものかはわかったと思う。

4級試験は入門(初級)講習の中間程度、3級は初級終了程度で簡単な文法問題も出る。今回の4級はやはり去年に似た出題だった。3級では特訓でやっと同様の文法問題(kiom daの用法)が今年も出ていた。

特訓や試験立ち合いで感じた問題点を少し書いてみる。Komencantoはどんなところを間違えやすいのか。同時にこれはGvidantoの注意すべきところでもある。

ともかく PRAKTIKADO が足りない!

全般的に感ずるが、1日たった10分でも、又は5行でも声を出して読むなり書くなりしていればわかりそうな間違いがある。いくらやさしくても練習せずに出来るようにはならない。余りエスペラントをナメてはいけません。

誤りやすいところ——チェックして見よう!

* longa "l" kaj ronda "r"

どちらも日本語では「ラ行」に書くところだが、実際の発音は合宿で練習した通り、違いますね。ときどき練習して下さい。発音で区別出来てなければ当然書くとき間違えます。エスペラントは、英語と違って、発音通りに書き、綴りの通りに読むコトバなのです。

* 数字に弱い——やはり使っていないから?

「この町の人口は10万人」「4年前エスペラントを始めました」等言おうとして数字がすぐ出てこないのは、日ごろアラビア数字で読み(目読)書きして、声を出して読んでいないからだと思われる。Krizantemoの「Esp. 会話独習法」が強調する通り、「声を出して読む」効果は大きいのです。

* 2冊の本——は Duaj libroj?

こう書きちゃった!人もいたが勿論正しいのは Du libroj. 16条文法第4条にあるように、数詞は無変化でこの様に使われます。unua, dua と-aがつくと1番目、2番目、と序数詞になる。気を付けましょう。

* Donu lajn florojn? 「例外なき文法」に注意!

belajn florojnにならって、つねに la を数詞に誤り、多くの人権について「小辞典」の三宅史平さん komencanto のときやってはそうでも、もちろん16条文法第1条の通定冠詞 la は如何なる場合も無変化です。菊垣もやってはいたので、「あの三宅先生もか!」と気が散ったものでした。



私のエスペラント交友録 (9)

山本昭二郎 Soğirou Jamamoto

いざ書こうと思う書くことがいっぱいあって取捨選択に迷う。以前、カワハラさんが編集長の頃は催促され、原稿を次々と書きつづけたが、それはまるで押出しクレヨンだった。カワハラさんが編集をやめてから当然催促されなくなり開放感に浸っていた。でもちょっぴりさみしかった。私は文章を書くのが好きなのかも知れない。

私は2回西欧に行っている。1回目は長女と18年前7～8月。2回目はedzinoと12年前10月下旬～11月にかけてで、埼玉の農家の御隠居さんのツアー。60歳～70歳の人が多く、足弱のedzinoには丁度よい行程だったが、秋の終りという点で良くなかった。やはりヨーロッパは6月～9月あたりが割高でも最良だと思う。

今は海外旅行千万人といわれ、いろいろな情報があふれている。今更私が野暮な解説をする事はない。ただ私なりにおもしろかった事、主として自由行動のことを書きたい。

XXXXXXXX パリの地下鉄 XXXXXXXX

その日は終日自由行動だということで長女と朝ホテルを出た。印象派美術館まで地下鉄を乗換えで行くことになる。乗換えの時、どう行くのか判らなくて長女は英語の通じそうな(教養のありそうな)中年女性に美術館へは?ときいて英語で教えてもらった。次の電車を待っていたらインド人らしい女性が赤ん坊を抱いてやってきて便箋大の紙を差し出した。日本語で「母子で生活に窮しています。温かい日本の紳士の御好意を……」とある。何フランか出した。彼女は男性ばかり狙っているらしく、ふとふり返ってみるとフランスの若い男にお金をせびっている。馴れているとみえてフランス男はないないと上下のポケットとはたいてみせる。美術館はコンコルド広場の近くで、前日見学したルーブルの壮大な建造物はガラリと違う。ゴシックの建物だが札幌の道立近代美術館と雰囲気似ている。印象派だけなのでルーブル美術館のような大きな宗教画ばかりの重苦しさが無い。室内の広さ、高さ、明るさは理想的。平日のためか見学者はチラホラ。私達はくたびれてお茶がほしくなり、ちょうど軽食のコーナーがあり、サンドイッチやワインをたのしんだ。もう帰ろうかと思っていたらツアーの仲間の娘達が6、7人、ベルサイユ宮殿の帰りだと入ってきた。彼女達(25～30歳)の行動は迅速で、何でもみてやろうの気持がありあり。

XXXXXXXX パリとローマでの買物 XXXXXXXX

添乗員や観光バスの運転手さん達はツアーの一行を土産物店に案内してくれるが、どうも平凡で気に入らない。ネクタイやバンドなどどっさり買う人にはよいかも知れないが。サムソナイトの旅行鞆の中型を買って行ったのだが2人分の下着や替服だけでももう入らない。それに前日、ルーブル宮の前でアフリカ人の行商が象牙の美術品を買え、という。一緒にいた東京の青年(大学生)が15,000円は高いから半額にしろ、とかけ合ってみたら、という。なんと、OKと握手されてしまった。実はこれは象牙ではなく石膏製で、見ざる聞かざる言わざるの三猿が彫ってある。置物として悪くはないがとても重くて旅行中難儀した。一時間自由行動、二時にバスに集合というので、長女と靴でも買おうか、とパリの高級そうな店のショーウィンドを見ながら歩いていたら鞆店があった。50歳位の温和な店主が一人だけ。サムソナイトの旅行鞆は買う気ないので聞いてみたら、これが良いですとすすめられたのは布製の黒い鞆、新聞紙2頁の大きさで四隅や握りは厚い豚革製。ポンポンと叩くと平べったくなる。これが5%引きの4万円。気に入って今でも飽きない。それを持ってツアーのバスに戻ったら皆眼を丸くしそしてニヤニヤ。

ローマで、もうそろそろ帰国だから土産を買おうと長女と高級な店を物色、ハンドバックを2つ買うことにした。一つはedzinoへ、一つは義妹へ。ローマが流行の最先端とはその時は知らなかった。その店は婦人物専門で、見たことのない斬新なデザインのがあった。タテヨコ細い革でチェックに編んだもの。東京でようやく流行したのは5~6年後である。

XXXXXXXX 飲食あれこれ XXXXXXXX

イギリスのホテルの食事はまずくて高い。馬鈴薯は半煮えだし、朝食の別売りの茹卵は1個300円(当時0.8ポンド)。私は高いな、と思ってたらedzinoがあつという間に買ってしまったので今更戻せない。酪農の国の朝食はみな良い。沢山の各種チーズ、ハム類、ステーキ。飲み物も生のオレンジジュース。パンも良い。オランダ、デンマークがそうでイギリスとは天地の違いだ。ロンドンのテムズ川に鯉(はしけ)が繋留されてパブになっている。夕方ビールを飲みに行ったがビールは酸味があつてまずかった。古い生ビールらしい。うまいものと言えばベニスの散歩をedzinoとした時、コップ酒屋みたいな店で仕事帰りの労働者が4~5人何か食べている。サンドイッチと判ったので2人分注文したら早速こしらえてくれた。歩きながら食べたが仲々うまかった。パンの間にはさんであるのは肝臓のペーストではないか。日本では一寸食べられない味。八百屋で桃を買ったが触れると怒る。棚にワインがあるので2ℓ入りを買ったが600円とは安い。ホテルで飲んだが少し辛口の赤で飲み易い。こんなに安くて旨いならワインによるアル中が多いといわれるのが判る。

XXXXXXXX ポンペイにて XXXXXXXX

ローマから「太陽道路」といわれる高速道を観光バスで南下。時は8月、上り下りの緩衝帯には夾竹桃の赤い花が咲いて延々と続いている。北海道にはない花だ。ポンペイ遺跡の入り口にはブーゲンビリアの牡丹色の花が門を形づくっている。発掘された広大な遺跡を歩くと照り返しが暑い。ローマで買った日本文の案内書をみながらぞろぞろ歩く。とある建物で、いつも積極的な若い娘達が入り口でもじもじとためらっている。〇〇の館とある。男達は興味津々と入っていく。ここは若者に性教育するところらしく壁にはモザイクの男女交歓の絵がある。今の娘達ならどうだろう。今更のように、あのもじもじしていた娘達がなつかしい。

XXXXXXXX トイレと連想 XXXXXXXX

旅行中トイレを使うのに有料のところが多い。コペンハーゲンのチボリ公園の男子用に入った時、目の前にハガキ大の紙質の悪いティッシュがある。それを一枚とって手を拭いていたら出口にたむろしていた老人にお金を請求された。他の人は紙をとらないから無料というわけ。小銭なくて紙幣を出したら、致方ない、いいよという。多分10円位ではないか。パリの駅でも難民らしいのが通行料みたいに取っていた。難民救済なら支払ってもよいと思った。難民といえば、パリでedzinoと人通りの少ない通りを散歩していたら小中学生くらいのジブシー風の子供が5人位寄ってきて金をくれ、という。ところが1人左手に新聞を持ちそれを屋根にして右手をのぼしてきた。私は週刊誌でこの手口を読んでたのでピンときて、何するんだ、と怒鳴ったら、私の上衣の内ポケットに触った手をひっこめた。往来の人は知らぬ顔。

XXXXXXXX スイスの旅 XXXXXXXX

edzinoと2人参加のツアーで11月のスイスを訪れたがシーズンオフで山麓の大駐車場が幾つもガラ明き。夏のシーズンには満車になるのだから人気が判る。登山列車で景色をみながら和食弁当（幕の内）を食べる婦人が2人。同じツアーに最後にかけ込みで加わった彼女達は旅行中和服と草履で70歳位。何回も海外旅行しているとか。この弁当は前日の昼食であるのを大事にとっておいたもの。箸を使って上手に上品に食べているのを立席のスイス人夫婦が珍しそうに眺めている。登山列車の終点はトンネルの中。ここからエレベーターで最上階に上ると3000m級の山々の見える眺望の筈だが猛吹雪で白一色何も見えない。高山なので息苦しい、間もなく下山、途中からバスになったが山頂は真冬なのに麓は秋で紅葉が美しい。田舎道をノロノロ進むバスの前方には放牧していた牛が牛舎に帰るところ。この牛達はココア色と白のブチでホルスタイン種と同じ大きさ。多分ブラウンスイス種だろう、乳脂肪は4%台である。折角アルプスに登ったのに何も見れず残念。だから冬の観光は？ である。

Kia estas vialingva saluto por
"Bonan apetiton!"

Acuŝi HOŜIDA(Tomakomai)

Min interesis la letero de S-ro KAWA-HARA pri "Bonan apetiton" en la n-ro 87, decembro 1993, de "novaĵoj tamtamas", internacia gazeto de jokohama esperantorondo. Tuj mi rememoris iaman donacon de S-ino Akiko NAGATA(poste ŬUSINK-NAGATA), kiu tiam estis en Rotterdam.

Post energia laborado por la 55-a Japana Kongreso en Sapporo(1968), ŝi forlasis Japanion por labori en la Centra Oficejo de UEA. Ŝi sendis ĝin al HEL fine de la sama jaro. Ĝi estis nur simpla buŝtuko de restoraciodrinkejo "Albertini" en Rotterdam, sur kiu troviĝas salutvortoj ĉe manĝo en lingvoj de 15 landoj plus "Bonan Apetiton" en Esperanto.

Kvankam mi ne komprenas tuton, mi povis vidi ke la vortoj signifas proksimume "Ĝuu vian manĝon", "Bonan apetiton", "Bongustan manĝon", k.s. Tiaj salutvortoj ekzistas en tiuj lingvoj. Certe japanoj emas havi tiajn vortojn ankaŭ en Esperanto, ĉar ili kutimas diri "Itadaki-mas" (mi ricevas vian regalon) antaŭmanĝe, kaj "Goĉisoo-sama"(dankon pro la regalo) ĉe la fino, al mi ŝajnas.



Mi skribis kiel supre al la gazeto leteron, kiun oni legis en la 90-a n-ro. Tamen hazarde en ĝi troviĝis ankaŭ letero de ukrainino Tanjo, "absolute la sama eldiro ekzistas en la rusa kaj franca lingvoj. Do oni povas vidi, ke tia eldiro estas jam sufiĉe internacia".

Lastatempe nia kamarado Kk atentis moron de religiuloj antaŭ manĝo kaj sugestis, ke la buŝtuko de U-Nagata certe vekos "apetiton" de la legantoj de Heroldo de HEL, do mi nun montras ĝin al vi, kvankam en grandeco duonigitan.

*** *** *** ***

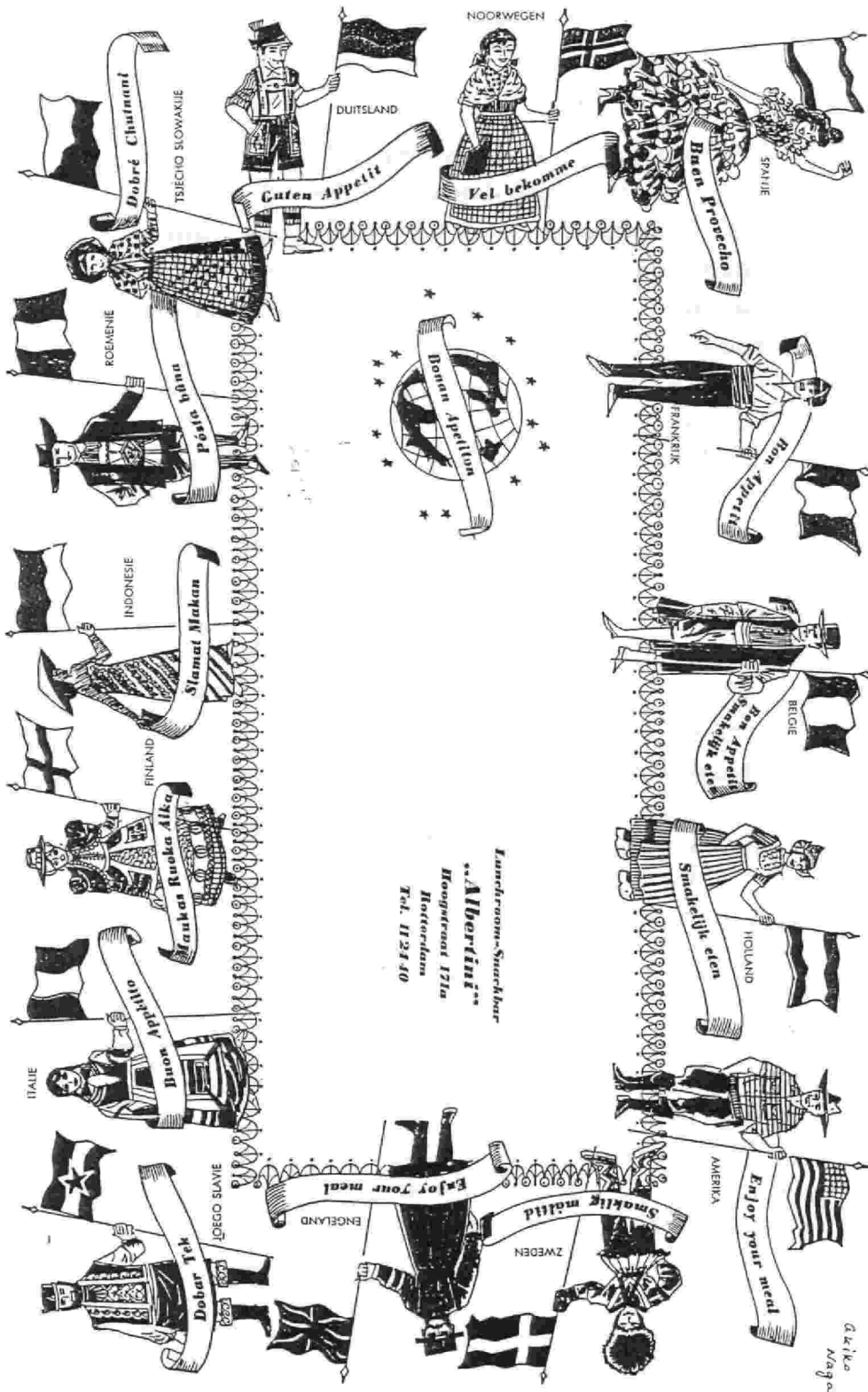
(Resumo Japanlingva ---日本語要約)

「いただきます」「ごちそうさま」の国際健忘?

横浜エスペラント会の機関誌、(n. t. 87号)でカワハラ氏が Bonan appetiton!のあいさつは日本的習慣でないかと述べていた。もう20年以上前だが、永田明子さんが送ってきたロツテルダムの酒と食事の店のナプキンには15ヶ国の食事の際のあいさつと、エスペラントの Bonan Appetitonがかかれていた事を思い出し、投稿。それが出た90号には、ウクライナの Tanjoさんから「同じ表現はフランス語やロシア語にもあり、充分国際的表現だ」とあった。この機会にこのナプキンを皆さんに見て戴くことにしたい。大きさは½にした。

(苦小牧 星田 淳)





Lunchroom-Snackbar
„Albertini“
 Hoogstraat 171a
 Rotterdam
 Tel. 112340

A.L.H.E.L.
 Grika
 Nagara

Kial Rumiko ne jetis sin en hokajdan Esperantion?

Studo pri iu esperantistino

KAWAHARA H. Kazuya,
prezidanto de Akademio de Rumikologio

Enkonduko

La tereno de Hokkajda Esperanto-Ligo (HEL), unu el la regionaj ligoj de Esperanto-grupoj kaj personoj en nia lando, estas plej vasta, kaj HEL estas unusola Esperanta organizo, kiu respondecas al tuta loĝantaro en la tereno pri nia kultura movado. Preskaŭ ĉiuj tieaj esperantistoj aniĝas al la ligo, pagas ĝian kotizon. Ili, noblaj kolegoj de la Majstro, energie dediĉas sin al disvastigado, praktikado, rekotizado kaj klaĉado en la bovlo. Tio montras alian fakton, ke HEL enskribis preskaŭ ĉiujn samideanojn de Hokajdo, kalkuleble malmultajn bedaŭrinde, en sian kaslibron. Jes, "preskaŭ ĉiujn". Ĝuste en tiuj vortoj kuŝas motivo de ĉi tiu studeto.

Kiu estas Rumiko?

NAKAMURA Rumiko, 36-jara samideanino nun loĝanta en Jokohamo kaj aktiva membro de Hama Rondo. Lastajn monatojn ŝiaj nomo kaj aktiveco rapide famiĝis tra la mondo kune kun tiuj de SUZUKI Hanako, ŝia lernantineteto.

Rumiko eklernis nian lingvon antaŭ dek tri jaroj en Tokio, kiam ŝi estis bankoficisto. De tuj post eklerno de la lingvo ŝi ne hezitis alparoli al alilandaj vizitantoj per ĝi kaj senlace okupiĝis pri korespondado kun eksterlandanoj. Interalie leterado kun hungara junulo havigis al ŝi planon vojaĝi al Budapeŝto por renkontiĝi kun li ĉe

Universala Kongreso. Kiam okazis nialoke Komuna Esperanto-Seminario inter Korea kaj Japana Junularoj, ŝi partoprenis ĝin, eĉ de foris en la akceptejo. La internacia renkontiĝo plivastigis ŝian esperantistan vivon.

Oni sendube trovas en ŝi modelan esperantiston kun verve kaj kompetenteco al nia afero, kvazaŭ ŝi eliris el bone redaktita lernolibro, per kiu komencantoj povas reveni pri si mem post monatoj. Certe ŝi estis tiel aktiva ĝis la komenco de 1984. Tamen de tiam ŝi enamiĝis en estontan edzon kaj abrupte entuziasmiĝis pri li kaj pri intergeamantoja kompreniĝo, ol interpopola kompreniĝo. Edziniĝo, patriniĝo kaj malsaniĝo ne plu permesis al ŝi tempoferon por nia afero. Ŝi ne estis libera de cirkonstancoj, en kiuj virinoj estas devigitaj vivi.

Baldaŭ la tuta familio de Nakamura transloĝiĝis al malgranda vilaĝo en Hokajdo pro transoficiĝo de la edzo. De tiam ŝi loĝis en la vilaĝo ses jarojn. Supozeblas, ke tiu transloĝiĝo al la por ŝi fremda loko en severa malvarmo iom ŝarĝis al ŝi, ĵus resaniĝinta. Kaj tie ne estus ŝiaj konatoj, kiuj kompensas ŝian izolecon. Tiun konjekton pravas la ago de ŝiaj gebopatroj. Ili timis denovan malsaniĝon de sia bofilino kun protektenda filineto kaj decidis daŭrigi kunvivadon kun la familianoj en Hokajdo, eble fremda ankaŭ por ili. Tiel ŝia vivo en Hokajdo ekpaŝis.

Ses-jara breĉo en ŝia kariero

Tiuj ses jaroj en Hokajdo estas breĉo de ŝia esperantista kariero. Dum la jaroj apenaŭ restis fadeno inter ŝi kaj Japana Esperanto-Instituto, kiu liveradis al ŝi "La Revuo Orienta"-n kaj menditajn librojn. Laŭ ies studo la breĉo komenciĝis de 1987 kaj finiĝis en 1993. La periodo estas sufiĉe notinda por hokajdaj esperantistoj, ĉar oni havis tutlandan kongreson de esperantistoj en Sapiro ĝuste en 1988. Kaj serioze indas mencii, ke ial ne troviĝis ŝia nomo en la partoprenantaro de la kongreso, al kiu aliĝis

ĉiuj membroj de Hokkajda Esperanto-Ligo.

Kiel montras dokumentaro de la kongreso, ĉe la kongreso la LKK alvokis eĉ aliĝon de infanoj en senpaga kategorio por plenigi la nomaron. Samideanoj kortuŝitaj de tiu larmveka afablo ĉiuloke leviĝis per ofero de la nomoj de siaj gefiloj, bubaĉoj, eĉ ankoraŭ sennomaj naskotoj. Tiun emocian epizodon estontece priskribos "La Granda Enciklopedio de Monda Esperanto-Movado", eldonota de UEA.

Malgraŭ tio, oni ne povas trovi nomon Maki, tiam vindportanta bebino de geedzparo de Nakamura, nek Rumikon mem. Ne dubeble estas, ke ŝi informiĝis pri la kongreso, okazonta en ŝia regiono, tial ke ŝi estis membro de JEI, kiu informas pri ĉiu esperanta aranĝo al la membroj. Noboru, ŝia edzo, konis sian edzinon esperantisto kaj li nepre iam esprimis al Rumiko sian volon lerni la lingvon por kapti la koron de sia amatino (viroj ofte esprimiĝas malprudente en tia situacio, ĉu ne?). Kaj nenio sugestas, ke tiutempe ŝi kuŝis pro denova malsaniĝo, kaj ke li ne aprobis ŝian vojaĝeton al Sapiro, opiniante ke tio melutilus al sanstato de la amata edzino. Eĉ se li insistus en tio, ŝi almenaŭ povintus nominale aliĝi al ĝi. Do, estiĝis demando: Kio igis ŝin ne aliĝi al la proksima kongreso? Ĉi tie ni nur atingas unu konkludon: JEI ne donis tutan informon ĉe si al LKK kaj HEL. Kondamnenda estas tia sekretismo.

Rumiko en la vilaĝo

Ni revenu ĉe Rumiko. En la malgranda vilaĝo, kiu ankoraŭ ne estas specifigita, ŝi estis sola esperantisto, samkiel multaj esperantistoj en la tereno, kiuj sentas sin izolita sen ofta renkontiĝo kun samideanoj, kaj kies esperantisteco normale estas tenata de poŝto kaj telefonlinio. En nia vidkampo ŝia postsigno ne videblas. HEL tiuperiode nenion informiĝis pri ŝi, nur nun eksciis, ke en iu vilaĝo en Hokajdo iam estis membro de JEI, nomita Nakamura Rumiko. Nun oni povas supozi, ke tie ŝi ne lanĉis

kurson nek similan kampanjon por la lingvo, kaj ke ŝi ege hezitis havi kontakton kun HEL pro de ni ne konata kialo.

Malfacile estas konjekti, ke ŝi, havanta sperton meti sin en Esperanta medio, ne sciis ekziston de HEL kaj la teneraj esperantistoj en la regiono. Kvankam estis nenia baro niaflanke, ŝi ial ne volis proksimigi sin al ni. Ŝi tamen neniam rezignis nian lingvon, kion pruvas la senrompa membreco de JEI kaj nuna aktiveco en Jokohamo. Kial do ŝi ne kontaktis kun ni en la periodo?

Renkontiĝo de ŝi kaj ni nepre alportintus grandan profiton ne nur al ni ambaŭ, sed ankaŭ al Esperanto-Movado en nia lando. Ŝia kapablo kaj kuraĝo sendube stimulintus hokajdajn esperantistojn kaj ni povintus forpeli ŝian izolcon de unika esperantisto en tiu malgranda vilaĝo. Tute bedaŭrinda kaj malfeliĉa malrenkontiĝo por ŝi kaj HEL.

Rumiko en Jokohamo

Post la ses-jara vintrodorma restado en Hokajdo ŝia familio transloĝiĝis en Jokohamon, kie radikas en civitanoj fortika Esperanto-Movado. Nun Rumiko viglas en Hama Rondo, kvazaŭ marvirineto en marparadizo. Tio konsiderigas nin, ke por ŝi hokajda Esperantio aspektis ne marparadiza, sed malparadiza. Nuna ŝi estas kvazaŭ imitenda esperantisto en nova lernolibro, eldonita de la rondo en la havenurbo Mevo-sora, 139-paĝa, ĉarme ilustrita, 1.000-ena kaj mendebla ĉe JEI. Ŝi ne sole instruas la lingvon al najbara knabineto Hanako, sed eĉ gvidas kurson. Hama rondo, la Mevo-sora rondo, ho, kia benita verda lumturo!

La studado de la Akademio ankoraŭ ne estas finita. La plej malfacila enigmo estas, en kiu malgranda vilaĝo de Hokajdo ŝi loĝis, ĉar en la arkivo de JEI jam ne konserviĝas malnovaj adresoj de la membroj. Sed ni paŝo post paŝo proksimiĝas al la vero de Rumiko.

Laŭ studo de iu akademianino la antaŭedziniĝa familia nomo de Rumiko estis DOI, kaj alia sekvis la studon, ke la

nomo Rumiko estus pseŭdonimo de iu Hamanino, kies nomo devus esti komenciĝanta per la litero Ĉ. Krome, iu raporto starigis aŭdacan hipotezon, ke Rumiko ne ekzistas en realo, sed ludanto nur en fabelo. La hipotezo estis malakceptita, tial ke ĝi detruas premison de la studado. Kaj iu sentaŭgulo, lacigita de longa esplorado kaj proponinta ke la plej racia rimedo por solvi la enigmon estas rekte demandi ŝin aŭ Hama-Rondon, estis kategorie frakasita per pugnoj pro la sama kialo. La Akademio estas komisiita sanktan taskon regali seriozajn legantojn per falsa studo.

Provizora konkludo

Supre ni sekvis la spuron de Rumiko.

Nu, inter HEL-anoj troviĝus rigoraj samideanoj, kiuj riproĉas al ŝi la malsincerecon ne pagi la kongreson. Aliaj konsiderus, ke ŝi neglektis hokajdajn esperantistojn. Eĉ flamus maltrafa rankoro al Hama Rondo. Kaj iuj aliaj mokus ŝin pro la malkuraĝo. Ne diru, neniam diru tiel. Ni nur laŭdu ŝian nunan sinoferon al nia kara afero, eĉ se ni bedaŭregas kun larmoj la malsukceson gajni la ĉarman marvirineton.

Ni devas vivi en realo. Sciu, ke niaj okuloj kaj oreloj ne kovras la tutan terenon tre vastan. Ne forgesu, ke en iu urbo, en vilaĝo certe iuj senkontaktaj samideanoj kun hezito kaj sopiro nun atendas manon de HEL. Malfeliĉe, ni ne sukcesis gajni Rumikon ĉefe pro ŝia hezitemo, sed tute certe la dua, la tria "Rumiko" sin kaŝas ie en Hokajdo.

Por ni nun bezonata estas firma kredo. Iam, ja iam nepre aperos antaŭ ni iu Rumiko, kiu savos la agonian situacion de nia movado. Kamaradoj, ĉu bone, larmojn forviŝu, vizaĝon supren! Kun la larme malsekigita standardo ni iru sur la teda vojo malfermita de Zaĉjo.

(fino)

(Pri la enhavo de la studo respondecas la aŭtoro sen iu celo provoki la Mevo-soran Rondon kaj la Ursan Ligon)

"Hanako Lernas Esperanton"



土居智江子著, Mevo-Libroĵ / 横浜 93年刊.
A5版, 139p, 185g, 1.000円. イラスト
多数, 説明丁寧, ただし全文エスペラント.

もうお読みとは思いますが、あらためて紹介します。小学生ハナコの家族と隣家のルミコの家族が主役の最新のよみもの形式の入門教科書です。教科書、ときくと敬遠されがちですが、この本はいまの日本家庭の日常生活をうまくとりいれているので、日本人は外国の習慣になやむことなく、すんなり読めます。外国でもテキストにつかわれはじめています。この本で勉強した韓国の若者とソウルであえるかもしれません。 (Kk)

もよりの書店で、日本エスペラント学会発行と指定して注文してください

GRAVA KOREKTO

Iu bona amiko helpis al mi redakti liston de fuŝaĵoj de mia fabelo, aperinta en la lasta numero. Tiun ellaboraĵon vi ne vidas en ĉi tiu numero, tial ke la redakcio devas cedi al ĝi plenan paĝon. Nur unu, la plej gravan fuŝaĵon, mi korektas ĉi tie.

En la epiloga frazo "Ni promesis baldaŭan revidon per manprenoj." (p.10, linio 4 de malsupre) troviĝas la maleleganta esprimo.

Legu: MAMPREMOJ, anstataŭ sobraj manprenoj, plorpetas

KAWAHARA H Kazuya

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

北海道は Hokajdo?!

うえに紹介した『ハナコ』では、北海道は、Hokajdo となっています。このかたちはPIVが採用しています。ところでソウル世界大会のUnua Informiloのさいご、韓国観光公社支店の所在地に気づかれましたか。札幌は Saporu となっています。『日本語エスペラント辞典』の巻末付録でも Saporu です。地名のエス化の極致は、日本国をJapanio としていることです。Nihon が japanio。これはHokkaidoかHokajdoになるどころのさわぎではない。ネッ。(Kk)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

第5回HEL委員会報告

RAPORTO DE LA KVINA KOMITATA KUNVENO DE HEL

1994. 6. 8. 星田 淳

〔日時〕5月31日19時35分～21時20分

〔場所〕札幌・京王プラザホテル1階「樹林」

〔出席者〕星田淳、馬場恵美子、阿部映子、渡辺晋道、国際部員(岩間陽子、水戸)

〔議事〕

*Heroldo de HEL Nro 52 遅れたが原稿は充分あるので整理して6月5日頃出す。残りの原稿と5月合宿の報告、9月の北海道大会の案内などを入れた53号は6月末か7月始めに出せる。

*サハリンとの交流

教育大学図書館へは本6冊を寄贈する。Fino Marina Sadovnikova (教育大学学生)にも3冊を贈る。図書館へのロシア語文は一部訂正したものをアマノさんが星田へ送り、星田が本といっしょ

Kajero de HEL-Komitato (HEL委員会記録)

小樽の大会後しばらくHeroldoに出なかったので以下簡単に記録しておきます。(星田)

〔第1回委員会〕1993年9月26日、小樽での第57回北海道大会後：阿部映子、切替英雄、馬場恵美子、星田淳、宮沢直人が出席：大会参加人員、本の売り上げ(64824円)等報告、全国誌への報告分担などをきめた。

〔第2回委員会〕10月12日、札幌ステーションホテルにて。切替英雄、星田淳、馬場恵美子、渡辺晋道、阿部映子、宮沢直人、外傍聴2名。年間活動計画、ヘロルド発行計画を討議決定。

〔第3回委員会〕12月14日、札幌京王プラ

ザホテル「樹林」に Marina さんへ送ることにする。

*開拓記念館の解説ほんやくの件

日本語、英語のtekstoはあるので、当面それを吟味の上北海道大会に出す提案を作る。

*第58回北海道エスペラント大会について
室蘭のS-ro須藤の提案により

場所 室蘭港湾労働者福祉センター

日時 '94年9月24日(土)～25日(日)

参加費 2500円、不在・家族参加1000円、Bankedo4000円

等をきめた。Informadoとしては6月上旬に出せばLa Movado7月号に出る、R.O.は7-8月合併号に出ることになる。

*アジアのエスペランティスト訪問団の件

北海道で何をやるか、可能性を検討する。

ザホテル「樹林」：児玉広夫、星田淳、切替英雄、阿部映子、渡辺晋道、宮沢直人、傍聴2名：ヘロルド50号編集、次大会の室蘭開催打診の件、新年会、合宿計画

〔第4回委員会〕1994年2月8日、「樹林」星田淳、切替英雄、権野正浩(国際部員)、馬場恵美子、阿部映子、渡辺晋道、三ッ石清(傍聴)：宮沢直人滞米中、開拓記念館資料等の報告、合宿計画の検討など。

閑人閑話

あじさいから学ぶ

名古屋 三ツ石 清

紫陽花 (hidrangeo) は、ユキノシタ科アジサイ属の花で、学名 (ラテン語) <Hydrangea macrophylla subsp.> で、その亜種、変種、園芸品種などがたくさんある。

アジサイ属には、園芸品種として普通に見られる西洋アジサイ、アジサイに、もともとは山野の自生種のヤマアジサイ、ガクアジサイ、コアジサイ、エゾアジサイ、ノリウツギ (北海道のサビタ)、ガクウツギなどがある。ここのHydroは、hidrargo (水銀)、hidroelektro (水力電気)、hidrogeno (水素) に見られるように、ラテン語の<水>の意味である。angea は、ラテン語angioで、器<容器>である。この属名は、<水の容れもの>の意味になる。

macrophylla について、これは属名の次に書いてある種小名で、省略の場合は、属名・種小名で、種名を現す。次の subsp. は亜種の意味である。sp. は <species> の略字である、エスペラントでは、specioだ。

ここで注意したいのは、国語の<種、種類>を、エスペラントにすると、例えば<一種の気違いだ>は、estas <speco de frenezulo> であるが、故松葉菊延さんは自著<和文エス訳研究>の中で、<unu speco de frenezulo> の訳例を示しているが、unuは要らない。(ザメンホフの用例)。<色々の種類>は、<diversaj specoj> だが、生物学上の<種、種類>は、必ず<specio, specioj> にしなくては不可。<macrophylla> は、makrokosmo (大文字)、maksimumo (最大) のように<大きい>。<phylla> は、葉 (folio) で、種小名は<大きい葉>の意味である。

さて生物学の学名はラテン語で書くことに決めてある。分類は、エスペラントでは、familio (科)、genro (属) specio (種) formo (品種) で、なを、subfamilio (亜科)、subspecio (亜種) vario (変種) kultura formo (栽培品種) なども覚えておくと良い。

genroとĝenroについて。この2語は語源的には同じもの(?) エスペラントでは、genro (文法の性、生物学の属) とĝenro (文学・芸術のジャンル) に分ける。supersignoの有無に注意する。

アジサイ (園芸品種) の学名 <H. macrophylla form. Otaksa Siebold> の Otaksa は、シーボルトが、愛人の長崎の遊女<おたき>の名前をラテン語化して、この花の学名に採り入れたのである。<註>最近、この故事をき



らってか別の学名を用いている図鑑が多い。このくお滝さん>は、我が国で初めの女の医者くおいね>さんの母である。くおいね>は、明治初期の優れた兵学者・大村益次郎の愛人である。私は、紫陽花をみると、シーボルト、お滝、大村益次郎が想起される。



アジサイ属の花の構造について。もともとヤマアジサイ、ガクアジサイにみられるように、萼(装飾花)が発達して、花びらのようにみえて美しい。花冠の中心に両性花の小さい花びら、雄しべ、雌しべがある。園芸品種のアジサイは、この両性花がすべて、装飾花に変わって、毬のようになったのである。ガクアジサイと違うことは、子供でも一見してすぐ分かる。。

(94-03-12 記)

第58回北海道エスペラント大会

La 58-a KONGRESO de ESPERANTISTOJ en HOKKAJDO

1年に一度エスペ란ティストが北海道に集まる季節がやってきました。今年の大会は室蘭。この地区での開催は久しぶりで(過去には洞爺湖で開催)室蘭の世話役もはりきっています。また大会期間中入門講習会を予定し室蘭でのエスペラント運動の活性化になることを期待しています。

開催地 室蘭港湾労働者福祉センター (室蘭市海岸町1丁目61番地 (電)0143-22-1021 JR室蘭駅下車)

日時 9月24日(土)1時30分~25日(日) *24日夜バンケードあり

会費 大会参加費¥2,500 家族参加費¥1,000 (食事は含まれていません)

不在参加費¥1,000 バンケード¥4,000 *北海道E連盟の会費も受付します(¥2,000)

宿泊 8月20日までに直接センターへ申込現地で支払(1泊朝食付き ¥3,300) 申込時にエスペラント大会と申し出て下さい。

支払方法 郵便振替口座 02700-6-17075 「北海道エスペラント連盟」
参加者名(家族参加者含む)、申込内容、住所、電話番号を明記願います。

締切 8月20日

詳細については改めて連絡します。

お問合せは 電話・FAX (011) 761-8060 馬場恵美子まで(20時以降)

5月から郵便振替通常払込み新処理システム導入に伴い北海道エスペラント連盟の郵便振替口座番号が変更になりました。

02700-6-17075 です。⇒

Heroldo de HEL
第52号(1994.7.15)
北海道エスペラント連盟機関紙
編集部
〒001 札幌市北区北12西1パークMS602
阿部映子気付 (電)011-756-2291
郵便振替口座
02700-6-17075
北海道エスペラント連盟